

◆おかげさまで10年目のトトハウス

★

1995年、阪神淡路大震災が発生し続いて地下鉄サリン事件があった年の春、東京から熊本にUターンし、その後7年ちょっとの財団勤務を経て、2002年7月に会社を立ち上げ、この7月で10年目に入った。行政の計画づくりを中心に、零細“地”コンサル事務所がよく潰れないで来たもんだと思う。みなさんのおかげ以外の何物でもない。しかし、多忙さに埋没し、その気持ちを忘れがちだ。それを反省しつつ、今後のことを考えてみる。

★★

3月11日に東日本大震災が発生した。福島原発事故の終息はちっとも見えてこない。事故機がかかえるリスクは3.11時点から少しも低減していないと思え、心が晴れない。福島の避難区域が、何十年にもわたり失われるという恐ろしい予感がどうしても消えない。で、そうになったらどうしよう、経済は、仕事は、資産は、とついつい自分のことを考えてしまう。被災地の方には冗談じゃない話だが、自分がこんなに心配症なのは、歳のせいかな経営者の特性か？

九州電力のヤラセメール事件は、この時期に、まったくお粗末な話。これと相前後して、原発のストレステストをすることになった。テストの詳細は分からないが、さっさと実施し耐性を厳格に示すのが筋だろう。廃炉にするかしないかは、そのあと考えればよい。ところが、玄海原発などはすでに簡易テストで済ますと決めたらしい。原発の再稼働という結論が決まっただけで、そこに向かって形だけ整える類の話のように思える。不正な採点とか、テスト項目を都合よく選ぶとか、最初からそんなことが疑われるテストなら意味がない。こんなことは、もう止めたほうがいい。でないと、市民一人ひとりが再生を心底確信することはできそうにない。

★★★

この20年ちかく、経済と政治はずっと低調。国の財政は破たん寸前で、来年は予算が組めるかどうか怪しい。今の高福祉、高公共投資を継続することは、どう考えても無理だ。インフラ整備による借金を孫子の世代へつげ回すへ理屈はなんとか通っても、自分が受けた福祉サービスや医療の代金を次代に借金として残すのは、勝手すぎる話だ。子孫に美田を残す必要はないが、900兆円を超す財政赤字は性質の悪い借金の押しつけ。でも、もう手に負えない。

こんな財政赤字を積み上げて贅沢をする生活を20年も続ければ、その国の人々は、やっぱりまともじゃなくなる。増税も歳出カットも、大事な決定を先送りし、何もせず、何も変わらず、何もかも停滞した。実は、“地”コンサルの仕事の内容もこの20年変化はない。こんなに長く変わらないのも考えたら異常だが、そんな環境だからこそ零細事務所も潰れずに済んだのだ。

★★★★

20年前、東京でコンサルをしている頃、公共投資の計画づくりの根拠に「日米構造協議の取り決めがあるから」という話をした覚えがある。それはどこかおかしいと思い、地域密着の仕事をするつもりでUターンしたはずだったが、つもり違いだった。結論が決まっただけで、そこに向かって形を整える作業。そして、借金を積み上げるからできているにすぎないこと。自分の仕事の多くは、いまだに少なからずその要素を持っている。ヤラセや不正採点はしていないつもりだが、甘い世界に安住していたことは間違いない。「借金を積み上げるからできていること」については改めて愕然とするほど痛感する。公的サービスにはそれを避けて通れない面があり、行政コンサルはそれに関わるわけだが、東日本大震災の後では事情が異なる。今動いている、借金前提の事業を今後どうするか？ 心配性の役割として、まずそれを考えよう。